

『フューリー』 原題 Fury 2014



© Norman Licensing, LLC 2014

映画批評

『フューリー』 —戦争(臨界状況)の怒り

塚田三千代 (翻訳家・映画アナリスト)

2014/10/15 © m.tsukada.

本映画を観たひとは誰でも素直に共感できると思うが、「ネバー・ウォー！」であろう。

1945年4月、第2次大戦終了を身近に感じながらも「任務」というミッションに縛られた行動しか許されない戦車小隊“フューリー”のチームがいた。このチームを率いるウォーダディに命ぜられた新たな任務は、連合軍の進路になるクロスロード(十字路)を占拠せよ、であった。

平原の茂みに隠れて待ち伏せする当時世界最強といわれた独・ティーガー戦車から強烈な砲火をあびる。砲弾が命中し、皮肉にも地雷を踏んで車輪が破壊して立ち往生してしまう。さらに不運なことに遠方から独・精鋭部隊(SS)300人が進行してきた。ウォーダディの頭脳明晰で機敏な指揮による戦車“フューリー”も太刀打できなくなる。

わずか5人で300人を迎え撃つとは、ついに生死の臨界状況に直面する。ウォーダディ (Wardaddy 戦争の父)はどのような決断をしたのか？

映画の製作総指揮をし、主演者でもあるブラッド・ピットは、「この21世紀には絶対に愚鈍な戦争を引き起こしてはならない」というメッセージを、映画全体で訴えている。

映画はセリフで反戦をひとつも訴えていないが、出演者たちの顔や眼の表情に細やかに現れる“戦争への怒り”が、我々の心の深底へ響いてくるのである。ウォーダディが戦車の影でたびたび見せる苦汁の表情から、彼の耐え難い心情がひたひたと伝わってくるのを気付かないだろうか。

戦場の史実に遺る最強の戦車対決(技術競争=米・シャーマン戦車 VS.独・ティーガー戦車)の外観ではなく、つまり表面ではなく裏面に隠され見落とされた人間の心情、その行動をとらえ、戦車操縦士たちの内面をリアルに浮き彫りした、じつにリアリティのある映画であるといえよう。



↑ 戦車の陰で苦悩するドン・コリア(ブラッド・ピット)

【映画情報】

製作総指揮：ブラッド・ピット BRAD PITT

脚本・監督・製作：デビッド・エアー DAVID AYER

配役(俳優)：

ドン・コリア (通称 ウォーダディ): **ブラッド・ピット** Don Collier "Wardaddy" : BRAD PITT
ボイド・スワン (通称 バイブル): **シャイア・ラブーフ** Boyd Swan "Bible" : SHIA LaBEOUF
ノーマン・エリソン (通称 新平/マシン): **ローガン・ラーマン** Noman Ellison: LOGAN
LERMAN
トリニ・ガリシャ (通称 ゴルド): **マイケル・ペーニャ** Trini Garcia "Gordo" : MICHEL PENA
グレディ・トラヴィス (通称 クーンアス): **ジョン・バーンサル** Grady Travis "Coon-Ass" : JON
BERNTHAL
ワゴナー大尉: **ジェイソン・アイザックス** Captain Waggoner: JASON ISAACS
マイルス軍曹: **スコット・イーストウッド** Sergeant Miles: SCOTT EASTWOOD
上演時間: 2 時間 15 分 製作年 2014 年

© Norman Licensing, LLC 2014

© m.tsuada. ALL Rights Reserved.